おはなしのくに

日本の昔話

語り　松岡 茉優

イラスト　武田 美穂

むかし、あるむらに、おじいさんとおばあさんが
くらしていました。ずっと子どもにめぐまれなかった
二人は、まい日、むらのうじがみさまにおまいり
をしていました。

おじいさん「うじがみさま、どうか
子どもをおさずけください」

おばあさん「どうか、どうか、おねがいします」

そんなある日。

赤(あか)んぼう「おんぎゃー、おんぎゃー」

二人のいのりがとどいたのか、とうとう赤(あか)んぼうがうまれたのです。

おじいさん「おお、うまれたか！」

おばあさん「ええ、ええ。とてもかわいい子ですよ」

けれども、その赤(あか)んぼうは、それはそれは小(ちい)さい男(おとこ)の子で、からだが一すん、いまでいえば三センチほどしかありませんでした。それでも、おじいさんもおばあさんも大(おお)よろこびです。

おじいさん「いっぱいたべて大きくなるんだぞ」

ところが、おとこの子は五つになっても、七つになっても、いっこうに大きくなりません。

むらの人たちは、この子のことを「いっすんぼうし」とよぶようになりました。

いっすんぼうし「えい、えい、えい…」
（足おと：バタバタバタ…）
むらの子どもたち
「やーい、やーい、ちび
すけのいっすんぼうし！」
いっすんぼうし「うわあ」
むらの子どもたち「ほれ、犬にふまれるぞ！」
（ワンワンワン！）
いっすんぼうし「うわあ」
むらの子どもたち「それ、カラスにくわれるぞ！」
（カーカーカー！）
いっすんぼうし「うわあああ！」
いっすんぼうし「うう、おらがこんなに小さいから、
おじいさんのはたけしごとも手つだえん。おばあさん
のめしたきも手つだえん。ううっ、ううう…」

ある日、いっすんぼうしは、
おじいさんとおばあさんにいいました。
いっすんぼうし「おらをみやこに
いかせてください」
おじいさん「みやこにいってどうする」
いっすんぼうし「ひろいよの中(なか)を
みてみたいのです。きっとりっぱに
なってかえってきます」

おばあさん「そんな小さなからだではあぶなかろう」
いっすんぼうし「だいじょうぶです。
おらにはりとおわんとはしをください」
おじいさんとおばあさんは
ひきとめましたが、いっすんぼうしのこころはかたく
きまっていました。はりのかたなをこしにさすと
しゅっぱつです。

（はげしい川のながれ）

♪ゆびにたりない
いっすんぼうし
小さいからだに
大きなのぞみ
おわんのふねに
はしのかい
きょうへはるばる
のぼりゆく

小さないっすんぼうしにとって、大きな川（かわ）は
大（おお）うなばらのようでした。
それでも、いっすんぼうしは、くる日もくる日も
川をこぎのぼっていきました。

いっすんぼうし「はあ、はあ。おお、ここがみやこかあ」

（みやこのたくさんの人）

いっすんぼうし「う、わああ！こ、これでは

ふみつぶされてしまうぞ」

しばらくいくと、大きなおやしきのまえにでました。

いっすんぼうし「おたのもうします！

おたのもうします！」

大じん「…おや、こえがしたのに、だれもおらぬな」

いっすんぼうし「ここです！あなたさまの

足もとにおります！」

大じん「やや、これはおどろいた。なんと小さなけんしじゃ」

いっすんぼうし「わたしをけらいにしてください」

大じん「うーん、おまえのようなものにいったい

なにができるというのだ」

いっすんぼうしは、はりのかたなをみがまえると、

（ハエのはねおと：ブウウウン……）

いっすんぼうし「えい！　やあ！」

とんでいたハエを、みごとしとめてみせました。

大じん「ほおお、みごとじゃ。みごとじゃ。

ほっほっほっほっ。」
その人はみやこでも名だかい大じんでした
こうしていっすんぼうしは、
大じんのやしきではたらくことになりました。
おひめさまはいっすんぼうしが大のおきに入りです。
おひめさま「いっすんぼうし、手ならいをするから
すみをすっておくれ」
いっすんぼうし「はい、ひめさま」
おひめさま「いっすんぼうし、かみをおさえておくれ」
いっすんぼうし「はい、ひめさま」
こうして、なん年かがすぎました。

ある日、おひめさまがきよ水でらへおまいりに
いくことになり、いっすんぼうしもおともをしました。
そのかえりみち、とつぜん大きな
おにがあらわれました。

おに「うおおお！ひめはもらっていくぞ」

おひめさま「あれええ！」

おに「うおおおお！」

いっすんぼうし

「まて！ひめさまにはゆび一本ふれさせないぞ！」

おに「あん？こえはしたのにだれもいないぞ」

いっすんぼうし「ここだ、ここだ！えい！えい！えい！やあ！」
いっすんぼうしは、おにのゆうかんに立ちむかいますが、
大きなおにのはとてもかないません。
いっすんぼうし「えい！ はあ、はあ…」
おに「なんだ、このちいっこいのは？ あーん…」
おにはいっすんぼうしをぺろりとのみこんでしまいました。
（ゴクン…）
けれども、いっすんぼうしもまけてはいません。
いっすんぼうし「えい、えい！」
おにのはらの中をはりのかたなでつきさし
はじめたのです。
いっすんぼうし「えい！」
おに「うん？ あっ、うっ…」

いっすんぼうし「えい！えい！えい！えい！」
おに「いたい！いたい！いたい！いたい、いたい、いたい！！」
いっすんぼうし「えい！えい！とう！えい！えい！」
おに「いたい！！」
おにはとうとうがまんができなくなって、
おに「これはたまらん！こうさんだ！
は、は、はっくしょーん！」
と大きなくしゃみをして、
いっすんぼうしをはきだしたかとおもうと、
いちもくさんににげていきました。

（とおざかるおにの大きな足音）

いっすんぼうし「ひめさま、おにがこれをおとしていきました」

おひめさま「これはうちでの小づちというたからものです。

これをふればどんなねがいもかなうといいます。

いっすんぼうし、そなたのねがいはなんですか」

いっすんぼうし「わたしのねがいは、

せいが大きくなることです」

おひめさま「あいわかった。うちでの小づちよ、

いっすんぼうしのせいを大きくしたまえ」

おひめさま「せいでろ」

（シャン）

おひめさま「せいでろ」

（シャン）

おひめさま「せいでろ」

（シャンシャン）

いっすんぼうしは、りっぱなわかものになっていました。

おひめさまをすくったいっすんぼうしの手（て）がらは、

みやこ中（じゅう）にひろまりました。

いっすんぼうしはしゅっせして

りっぱなさむらいになり、

おひめさまとけっこんしました。

もう「いっすんぼうし」といわれることもありません。

そして、おじいさんとおばあさんをみやこに

よびよせて、いつまでもしあわせにくらしました、とさ。

おわり